



稻田 千著

「臺灣歌謡集」第一輯

陳紹馨

國風が、學者の研究によつて古代の民謡であつたことを見ても、民歌俗謡が如何なる意義を有するものであるかを察することが出来る。劉廷氏は次の如く述べてゐる。

『愚言、愚夫之言、聖人擇焉、誠以歌ふ歌、田野の人の素朴純情な思ひを歌つた歌に、この上なく美しいものがある。

約那約到月上時 看々等到月錦西不知奴處山秋月早還是郎處山高月出遲

蘇州の山歌のこのやうな一首は、杜甫の筆をもつて來ても以上のものは出来まいと謂はれてゐる。又次の様な瓊州戀歌について見るがよい。

稻田氏の「臺灣歌謡集」は臺灣の歌謡を集録解説したものである。第一輯に集録されたものについて見るに秀れた歌謡が比較的に入り組み思はれるが、併し例へば第四十二首の合

て秀れた歌と謂ふことが出来やう。民間文藝の重要な一部門である歌謡は、學究の上においても少からざる意義を有するものである。

時代社會の研究の僅多な資料の内、詩代社會の研究は最も信頼に値するものの一つに數へられ、グラネーの如きはその好著「古代支那の祭所眞見、聞其聲是所眞聞、故其聲聽而歌聲」において學者によって自鳴天籟、發而爲言、亦皆質而不文譬如大美不和、大音希節、究其至理所存、殆有如渴飮食之不可易者、

是以古先聖賢、採風問俗、十五國風、大抵鄙里曲巷、男女歌謡之所爲作也。』

味はふべき言葉である。

稻田氏の「臺灣歌謡集」は臺灣の歌謡を集録解説したものである。第一

輯に集録されたものについて見るに秀れた歌謡が比較的に入り組み思は

られるが、併し例へば第四十二首の合

てても臺灣歌謡の研究は少からぬ意

義を有するものと謂ふことが出来や

う。しかし歌謡の一句や歌謡

もと思はれない俚語の一

う。

稻田千著

「臺灣歌謡集」第一輯

陳紹馨

稻田千著

「臺灣歌謡集」第一輯

<p

の一首が、往往にして生氣を帯びる
い精緻な調査等に畫龍點睛をし、生
きた人間の姿を現出せしめる手がかかる
りとなることを看過してならないので
ある。歌謡は民俗理窟へのよき手
がかりであるのみでなく、民族生活
全體の理解へのよき手がかりでもあ
る。この点からいへば、歌謡は、歌
謡そのものよりも、歌謡を通じて、
民族の歴史、文化、風習などを理解す
る所以である。

支那半島は支那に始まつて支那に終るものと讀者が云つてゐる。空襲の當否を問はなくとも、帝國を観主に戴く大東亜共榮圏の有力な一構成員として支那を擧げなければならぬのは、固より議論の存しない處である。廣い支那のうちでも、北部佛印、タイ、ビルマと人種的に文化的に限りない交錯を有する西南支那は問題の重要な一點たるを失ふものではない。この西南支那、殊に南支那の民俗の研究によつて、我が臺灣は地理的には勿論のことその他の點についても良好の條件に恵まれてゐる。

い、既知のものを土壤として漸次未知のものに及んで行くものである。

れ程の迷めい惑わくに陥り倒産するのも困難であらう。臺灣歌謡集はこの點で内憂外患による立派な労作である。

にこいつも考案を進められることを希望するものである。

支那生徒は支那に始まつて支那に終るものと云ふ者が云つてゐる。空襲の當番を問はなくとも、帝國を厭惡するに載く大東亜共榮圈の有力な構成員として支那を抜けなければならぬのは、固より議論の存しない處である。廣い支那のうちでも、北部が印、タイ、ビルマと人種的に文化的に限りない交錯を有する西南支那は問題の重要な一點たるを失ふものでない。この西南支那、本に西南支那

潤の民俗に對して如何に頗りない知識しかもつてゐないものであるか、専門家の説明を聞いて始めて「さうであつたか」とうなづく處を見ても、その間の消息が自ら明かであらう。民俗の理解には先づ言葉を知らなければならぬが、言葉を知った上に更に民俗そのものに対する心構へが必要である。人間は全然未知のものを始めから理解することが出来な

これに相當期間力を注がれることは、
懇切なる解説、該切なる諭諒にいか
んなくその效果を見してゐる。殊に
臺灣歌謡の大作家林清氏の協力を得
てゐることは何よりの仕合である。
之が内地人のみの勞作であるなら、あ
くまでも互に正確な意義を十分
に盡すことは恐らく困難であらう。
又本島人ののみの勞作であるなら、あ

にも無説の意圖が含まれてゐるが、専らこの方向に向って研究的であることを希望するものである。それについては戒めの歌、情歌、換茶相聲歌等の如き内容による分類法や、長歌短歌等の如き形式上の分類法の他に、北部中南部後山等の如き地域、領主前領主後現代等の如き時代、福建廣東等の如き種族亦然り農民工人等の如き階層及其他の事項

決問題といはなければならない。乍
併言語に通することは直ちに民俗と
通ずることではない。臺灣の言葉に
通じ、且々自誇してゐるが専門用語

臺灣の歴史については既に若干の
集録及解説書があつたが、稻田氏の
著書はかなり顕著な特色を備へてゐ

研究をなし、それを以て比較考究して始めて明確な姿を把握することが出来ると思ふ。この點からいっても臺灣の民俗の研究は相當な意義を有するものとはなければならない。

を見出され、官民のはからひでその改革尚左が目論まれてゐるのは、昨今快い消息である。専間に附せられた臺灣歌謡も今やその意義が開闢されてよい時期であると思ふ。無縫